

おおやまと

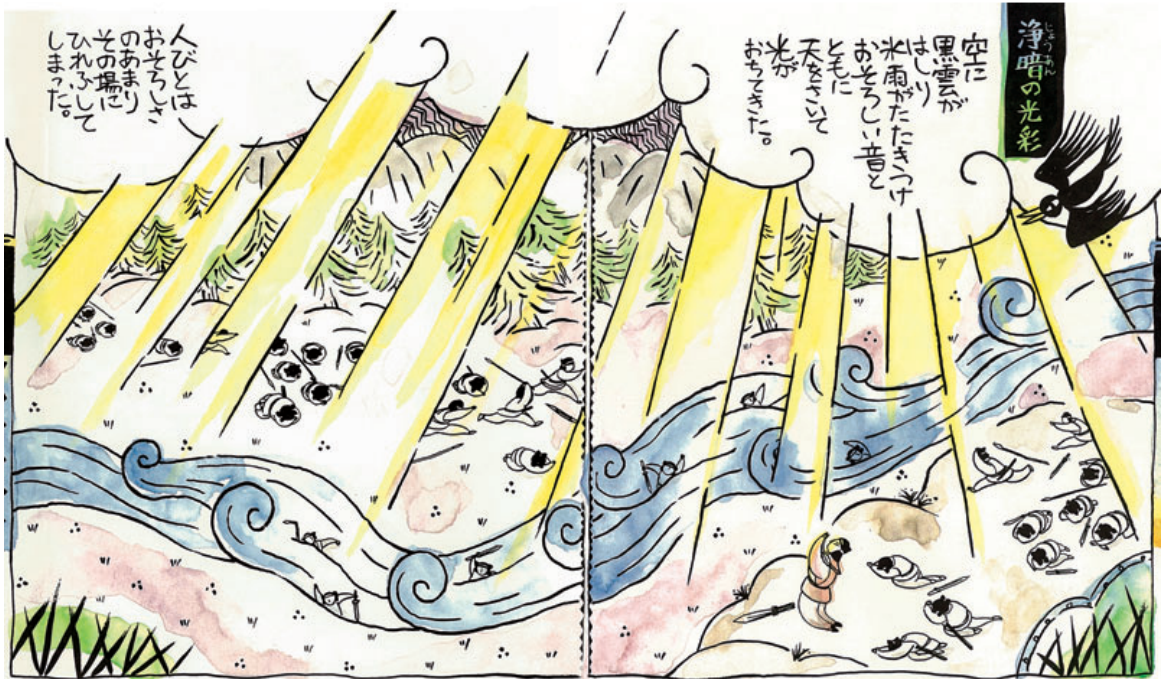
大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成28(2016)年
12月号

通巻556号
毎月23日発行

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成28年12月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷製
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



倭伝承『長曾根日子命』より金鷄発祥の場面「神の光隕つ」

絵：牧田よしゑさん

平成6(1994)年12月4日 金鷄祭法話より

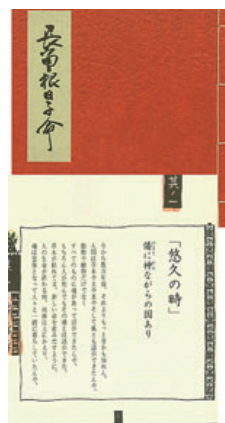
金鷄祭は、日本の平和記念日

大倭神宮にて

法主 矢追日聖 (満82歳)

平成六年五月に拝殿で、「創作集団えん」(代表・栗山美智子さん)が、「加美想望」と題する「太古・神ながらに生きた悠久の人々と恵み多き大地へ捧げる」という創作舞踊の会を催しました。

その時、観客へ配るパンフレットのようなものとして『倭伝承 長曾根日子命』を発行しました。



同じ年の金鷄祭の後、その朗読会が、大倭神宮社務所において行われました。これは朗読会の前の法主さんのお話です。

その後が続いて『倭伝承 長曾根日子命』の「あとがき」を掲載しますので、併せてお読み下さい。
(編集部)

歴史の嘘と事実

今から二千年ほど前の言い伝えの話になるけれども、十二月四日は金鷄発祥の日ということ。『日本書紀』には、戦争の最中に金の鷄が飛んで来て神武天皇の弓の先にとまった、その光のために賊軍は目がくらんで戦えなくなると、神武天皇が有利なように書いてます。勝敗は書いてないんですけど、こちらのヤ

マトの長曾根日子は賊軍になっております。

本当はね、平和記念の日なんです。鵺と言っても鳥のことではないんです。「ひ」は靈魂のこと、「とび」は「とびひ」で靈魂が飛ぶということなんです。例えば鎌倉時代でも日蓮聖人が龍ノ口で首を切られる時に、江の島の方から火の玉が出てきて役人が怖がって太刀を取れなかったと日蓮の日記にも書いてます。この火の玉が「ひ」です。何かのきつしよ(※方言か、物事の改まること)の時には、神秘的なことが起こるというのはあり得るんです。元寇の時に、玄界灘で大きな風が吹いたために蒙古の船が沈んで助かったとかね。現代の大東亜戦争でもやっぱり広島島の原爆によって戦争が終結した。世の中には我々の科学や常識では分からんような事態があるんやね。

『日本書紀』は奈良朝の元正天皇の時代に出てきた上がってるんやわね。それが日本の歴史ということになっておるんやけど、世の中がだんだん変わって最近になると色んな人が『日本書紀』を研究して、二割はほんまか知らんけど八割は嘘とか、堂々と言う学者も出てきています。

ということね、もう既に、仁徳天皇の頃に韓国から王仁博士が日本へ漢字を持ってきています。帰化人がたくさん来ていたし、その当時から文字で書いた記録というのが、全国にたくさんあったんです。それから何百年か後に出来たのが『日本書紀』やからね。

天武天皇(元正天皇の父)の時に、各地の色んな伝説とか歴史を全部、職種で集めたんです。中には焼けてしまったものもあつたしね。それを以て、自分達の天皇家が一番正統であるように書いて、日本の正史としたわけです。全部天皇家が都合良いように書いている。それは事実です。そらややこしいところあるねん。

天啓による政權交代

今から百七十二万年前と言うから永い話や。稲田日女命さんと須佐之結命さんがここ(大倭神宮)に初めて来られて、二人の間にお生まれになったのが饒速日命さん。饒速日命はこの場所生まれてます。

それから何万年も後の話になんねんな。神武天皇が——天皇と言うのは後のことやけれども——九州から来ていることは事実なんです。その時、饒速日命の系統が歴代のオオヤマトの大王さんで、代々、長曾根日子命やってん。

そして九州から出て来た神武天皇さんは、ヤマトのお姫さんと結婚して長曾根一族の婿養子になってはるの。そこから伝わってきているのが、現在の天皇家なんです。だから長曾根大王の続きであるのに、『日本書紀』では長曾根日子を賊として扱ってるんですよ。まあそうせんとね、九州を中心に考えたら、賊軍と言わないと話は合わない。

九州から出て来た時には、瀬戸内海を通って来たんやね、丸木舟で。丸太の大きいのは楠です。楠で丸木舟こさえてるんやわな。それでね、私、びっくりしたことがある。うちの母親は歴史なんか何にも知らないんですよ。それが(※霊視した時に)、「あの舟、何や」と私に言うんやわね。私は分かっているけど「知らんよ」言うのと、「舟が通った時に樟脳みたいな匂いがある」と言うんですよ。

舟一つに二十人ほどしか乗られへんと思うねん。長年かかって来ておるんやから、食べる物も持ってこんならんし、戦の道具も持ってこんならんし、兵隊の数かてわずかやと思う。

それで瀬戸内海から河内を通って生駒山を越えて、ヤマトに入ろうとした。ヤマトの方では、来

るとい情報が入ってるから日下の辺りで待機しとってん。

そら戦争にならんかったんです。九州はパーンと負けてしまった。一番上の兄さんの五瀬命は、矢に当たった。『日本書紀』には流れ矢と書いているけど、『古事記』には痛矢串(毒矢)とはつきり書いている。それで和歌山の方へ回って行った時に亡くなっている。一番偉い大将がね。あとの弟さん二人も熊野灘で死んでしもた。

それで四番目だったのが神武天皇なんです。どう考えてみても、九州は弱かってん。あんまりかわいそうやから葛城辺りの加茂氏とかが協力してくれて、南の方から何とかヤマトに入ってきた。そんなんが実情なんです。

鳥見(登美)で戦争した時は、もう今負ける、オオヤマトの方が勝ちどきを上げようという瞬間に、上から光がボワツと出てきた。それを天啓として長曾根大王の方から講和の条件を出したんやな。それで神武天皇は助かってるわけや。条件を受け入れて、自分の連れてきたお妃や子供とは別れて、長曾根の一族のお姫さんと結婚して、長曾根大王の後を引き継いだんや。大王って天皇(スメラミコト)のことや。

実情がそうであるのに、だんだん賊軍扱い。日本の歴史から抹殺されています。昭和十五年の紀元二千六百年記念の頃、私が「長曾根日子……」と話しただけで、「弁士注意」と言われてんからね。

それでここに居る人格霊は気に入らん、腹立つねんな。人間のやわな。ここの神さんはご機嫌が悪いわけ。

それが終戦から五十年経って、ようやく私がこんなことを言うたって誰も不思議に思わない時代になりました。『日本書紀』から計算して金の鵺

が出たのが十二月四日らしいので、金鶏祭という名前にしてまずけど、日本の平和記念日として行っています。

今日は皆さん、本当に意義ある日にお出でになつていると思つて非常に嬉しかった。私も朗読を楽しみにしております。

日本の祖先は饒速日命（大国主命）

大倭神宮は、今こんなに小さいけれども、色んな系統が無数にあんねん。

最近、饒速日命さんが日本の祖先やと、曲がりなりにも書いてる人がおつてくれるのはありがたいなあと思います。大国主命、大己貴命オホニキミというのは饒速日命の別名や。

長曾根日子命が神武天皇に政権交代した話が、大国主命の国譲りの話と重なつてます。この伝説は、全部山陰の出雲の国にいつています。長い年月のことですね。

この間青森に行った時、石塔山やとか叡鬼山神社という所（岩木神社の本宮）へ行きました。そうすると長曾根の系統の霊界人が迎えてくれました。神武天皇と政権交代した時、一君に仕えるのは嫌やという連中が、北を向いて行つてるんやな。そして向こうの地の人と一緒になつてきてるのが奥州の文化です。

私がそんな気遣いみたいなこと言うたかてね、最近、疑わんと協力してくれる人が現われて、ありがたい時代になりました。もうちょっと年が若かったら良かったんだけどな、しゃあないわ。命のある間に、できるだけしゃべつておかなあかんと思つてます。

では、あとよろしくお願いします。

(文責・編集部)

製作・発行・創作集団「えん」
一九九五（平成七）年三月一日発行の第二版より
倭伝承「長曾根日子命」あとがき

新しい文化創造をめざす創作集団「えん」の私たちは、ある縁でひとつの驚くべき事実に出会い、今回この小冊子をまとめました。共同体を主宰しておられる奈良市在住の矢追日聖氏が幽界から聞こえてきたものとしてお話し下さったものです。それはこの小冊子に表わされた「日本の古代の平和な世界」でした。

奈良市の西郊の地に、「大倭あじさい邑」という共同体があります。この代表者が矢追日聖氏です。氏は、戦後直ぐにこの山中に入り、自ら耕し、ランプ生活から、現在八十三歳に至るまで、「日本の古代の平和な世界」・理想郷を追い求められました。その精神は「地下水のごとく清く流れ、紫陽花のごとく咲く」ことで、今は大勢の人を受け入れ、身体障害者などの三つの福祉施設（※当時の数）と病院などもあり、邑人が地に足をつけ、こころ豊かに暮らしておられます。

古代の記録による国の始まりは、記紀にあるように神武天皇が九州から奈良地方を目指して攻めのぼつた（世に言う「神武東征」）時に、「東方によきクニあり」ということで話が始まったことになつていきます。それは、「東方に悠久に続いてきたよきクニ」の在ることが伝えられていたということでした。

今まで縄文時代、いわゆる神武以前と言ってもいい、このクニの姿はあまり明白ではありませんでした。しかし関西のこの地に、はつきりとこの

クニの形がありました。大倭神宮に関する「長曾根日子命」の神ながらの古代の精神がそれです。それは日本精神の原風景ともいえるべき「古代のよきクニ」のことでした。幼児が純粹であるように、人類も汚れを知らなかった。純粹なものが生きていた空間・時代がかつてあったのです。

もっと人間が自然の一員として素直に生きていた時代
もっと人間が人のことを思い、お互いに気遣いながら生きていた時代

ここにはみんなの幸せを願い、命をかけて新しい時代へと進めた「長曾根日子」という偉大な大王が生きていた壮大な時代があったのです。

何時しか歴史も塗り替えられ、その心も忘れられ、そして現代には寒々としたものが流れていきます。世の中は物質主義で充滿し、世界の各地で際限のない所有のための多くの戦争がなされており、人類は果たして今まで何を学んできたのかという思いがします。

今回、「えん」のメンバーは、見えるものしか信じないこの行き詰まりつつある時代に、目に見えないものを信じて大いに感激しました。ここに示された深いあり様において「壮大な融合」のドラマは二十一世紀へ、これからの私たちの精神を導くものとなることを感じました。この心が一人一人の心の中に芽生えることが平和運動なのです。

私たちはいま、現代人が失った心をとりもどす旅立ちが必要と考えます。それは太古から自分の心の中に、微かに伝えられた精神の源流を呼び起こす旅にほかなりません。

平成28年10月30～31日
 第332回大倭会秋の一泊文化行事報告
 瀬戸内海の多島美・歴史を訪ねる



墓標の松



松浦武夫さん



栗林公園

墓標の松
 800年の昔、屋島の戦いに敗れた平氏は仮住居とは言いながら1ヶ月半も暮らしたこの島に別れることになった。
 あわてて船上に逃れた最後の2-3日は負傷者、戦死者かここに送られて来て東の浜にも西の海岸にも悲しみの墓標の松が並んだ。今もこの松の大樹の下から人骨、刀剣などが発見される。



納骨堂



大島到着

50年ぶりの訪問
 島で生きても、島で死んでも

あじさい色 杉本 順一

今回の文化行事で高松市庵治町の国立療養所大島青松園を訪問した。私が初めて訪問したのは昭和39年6月11～13日でした。ここは「らい療養所」と言われ、この病気を発症すれば強制的に隔離された時代が続いていました。今はらい病とは言いません、ハンセン病と言われます。表現する言葉を変えても偏見の実態は急に変わりません。

同じような療養所が瀬戸内海の島には岡山に長島愛生園・邑久光明園があります。長島愛生園に森本春樹さんという方がおられ、昭和40年2月23日の『大倭新聞』に書いています。

『ライは治る。と実証されたのはもうかなり昔のことである。にも拘らず頑強な隔離政策という、独善的な少数の日本の医師によって不当にも私達は余儀なく、島に二十年、三十年の苦渋に満ちた生活を強制されてきた。あたかも徳川政策のような、鎖国的盲信の犠牲である。もう二十年前に、日本のライに関する限りの権威者が、外国の医学に謙虚に指導をうけていたら、今日なお社会に無知な怖れと偏見差別を、こうまで根深く残すことはなかったであろう。』

こんな思いは大半の患者・元患者さんに共通の思いであったと思います。園にいてなお本名を語れない人達がたくさんいました。故郷の人達に園が知られてはまずい、家族も患者のように差別されるから……。

森本春樹さんが邑に来て大倭安宿苑から故郷の兄さんに電話をされたときのことを思い出しました。何十年ぶりかで兄と言葉を交わされ大喜びされましたが、数分もしないうちに「わあっ」と泣

き出されたのです。そばにいて私はびびくりしました。森本さんに、どうしたのかお聞きしました。兄との話しは嬉しかったのですが、近くで女性の声が出た途端、兄さんの口調ががらっと変わり他人の会話になったようで、近くに兄嫁さんが来たので電話を切られたようでした。電話を切ってしまった兄さんも辛かったです。患者さんもその家族も、こんな思いを秘めながら暮らすしかなかったのです。

今度の文化行事の出発前に法主さんの奥津城にむかい、「青松園に行つてきます」と挨拶しました。法主さんからは「ミナヲ ツレテカエレ」の一言でした。この日は10月30日、法主さん一家がここ大本宮に移られた日でした。紫陽花邑の誕生日です。なんの偶然かこの日に大島青松園を訪問しました。

50年を超えての再訪問でしたが、園の納骨堂の前に立つて皆さんの聖歌の声を聞きながら手を合わせました。骨になっても故郷に帰れなかった人達の想いは想像も出来ません。今も厳然として実在する彼らを、肉体としての故郷ではなく魂の「大親元」である大倭太加天腹にお送りするのが今回の大倭会文化行事の使命の一つだったと思います。

ちょっと文化行事から外れますが、来年の祖霊祭には帰幽された親族同士が楽しく再会していただきたいと思えます。

楽しい二日間だった

大阪市西成区 山本 美恵子

その日の予定が無い限り、「誘われたらどこへでも行く」が信条の私。福田きよ子さんの「行かない？」の誘いに即座に行きます、よろしくと応



直島にて

草間彌生作品



写真：見田瑛子・李章根さん等



屋島



大島の浜辺



朝焼の屋島



大島遠景▶

昭和44年法主様撮影『すさのお』第39号より

えての参加だった。

十月三十日八時、大倭病院前出発、明石海峡大橋を渡り四国へ。まず栗林公園へ。幾度も行ったことはあるのだが、松をあんなにすらつら解説つきで見たのは初めてだった。見事な松の栗林公園に故郷香川県をちよっぴり誇りたい気分だった。

昼食後、大島へ。五十余年暮らした大島ではあるが、退所した限り甘えの気持ちを持たないよう寄りつくのは止そうと思っていたが、この七年の間、二人の友人の葬儀に行っただけで、目的もなしに行ったのは初めてだった。今度は会いたかった方々に会え喜んで貰え、二時間余りだったが温かい気持ち一杯もらった気分になり嬉しかった。帰りは、桟橋を離れた船が退職職員を見送る時のようにゆっくり大きく廻ったが、それは航路が変わったのではなく私の為、見送ってくれていた友人達の為の船長さんの計らいだったと、後で知り涙ぐむ思いだった。絶対に拒否していた「島は第二の故郷」の言葉がうかんざりした。

宿泊は実家への行き帰りの予讃線で仰ぎ見していた「花樹海」。あこがれの五つ星のホテルにしては部屋は今ひとつと思わないでもなかったが、料理はおいしかったし、見はるかす夜景や、そして翌朝の窓一杯に広がる朝焼けの景のすばらしかったことは忘れられない。

三十一日はフェリーで直島へ。月曜日で地中美術館は休館。あのモノの大きな睡蓮が見られなかったのは残念だったが、ミュージアム内でおいしい昼食を食べ、私にはこれが芸術？と疑問符だらけの美術品も沢山見た。桟橋の草間彌生の大力ボチャもこの度は触れたり中に入ったり。空が薄曇りだったので眩しさに弱い私も充分楽しめた。

帰りは宇野港へ。何十年ぶりか、宇高連絡船時代の面影は皆無の港に上陸。それからは一路奈良

へ。予定通りの十九時三十分到大倭病院前に到着。私はそのままのバスでJR奈良駅まで送っていただくというぜいたくを味わった後、電車で帰宅。

元ハンセン病回復者ということと敬遠されたり、また特別優しく接しられたりに慣れていた私には、大倭会の方々が自然体で接して下さったのはとても新鮮な感じだった。それに二日間皆様と接して、どのお方もとてもいい表情をされているとつくづく思った。こういう表情こそが長年の施設暮らしで失ったもの、また得ることの出来なかったものではないかと思ひ思ひ思ったことだった。居心地のよい二日間、有難うございました。

文化行事は味の世界

あじさい色 李 章根

地の豪族佐藤氏によって築庭され、一六四二年讃岐国領主生駒氏に代わって高松に入封した水戸光圀公の兄・松平頼重公(初代高松藩主)に引き継がれ、以降明治維新に至るまで松平家の下屋敷として使用されてきたという。

昼食後、高松港へ。正面には屋島がそびえている。大島への船を待つ間少し時間があつたので、それぞれに散策。港から海を見ると小さな真鯛達が泳いでいる。近くには堀で海につながっている高松城や、瀬戸内国際芸術祭に出展している台湾の芸術家が造った巨大な作品が展示されていた。船に乗り込み大島へ向かう。昭和四十四年十一月法主様が初めて青松園に向かわれた時は、酷寒の中、雨と強風で船は大揺れだったそうだ。

大島青松園の棧橋に着くと入園者の女性が車椅子で迎えてくださった。帰りの時もこの方が見送ってくださった。印象に残った。

まず目に入ったのは、源平船合戦、戦死者達の墓標の松。もちろんだがここ大島にも幾重にも積まれた歴史があつた。

すぐに納骨堂のある小高い丘にあがる。私達のために大阪から青松園の案内に来てくださったF IWCキャンパー松浦武夫さん(元菅原園職員で現在、枚方市社会福祉協議会・在宅福祉課)のお話を聞く。現在の入所者は六十三名。平均年齢八十三・二一歳。今後青松園をどう維持し残していくのか問われているという事であつた。続いて杉本順一・岸野春子さんがかつて青松園を訪れた時の思いを話された。

源平についても、らしい歴史やここで生きて来られた人達に対しても、認識不足の私の想像が到る範囲はすぐに尽きてしまい、入園者の住居跡と島の風景、そして周囲の海と波音に、ただ言葉にできない、つかみどころのない感じを泳がせるし

かなかつた。

以前、岡山の長島愛生園の納骨堂に立ち、挨拶を済ませて帰ろうとした時、園のラジオから流れてきた「帰りたい 帰れない ここは無言坂」という歌を思い出した。

旅館「花樹海」に到着。杉本さんの乾杯の挨拶で、十月三十日は大倭紫陽花邑の始まりの日であることを皆で再確認し、恒例の宴会が始まった。旅館の方々のお心使い、料理、温泉に大満足し、歌って踊つての楽しい時間だった。

翌日は、高松港から直島へバスごとフェリーで渡り、美術館とホテルが一体となったベネッセハウスにて現代美術鑑賞と昼食。のんびりとして、岡山宇野港に渡り奈良に無事帰宅の途となった。

大島青松園を訪れて

三重県名張市 鈴木 晴香

今回初めて大倭の文化行事に参加させていただきました。お天気にも恵まれて、最高の景色を満喫でき、日頃の疲れも癒された旅になりました。

国立療養所大島青松園は、ハンセン病の方が完治した後、今も暮らし続けておられるということと、この旅で訪れるまで私はその存在を知りませんでした。ハンセン病のことも、学生の頃に授業で習った程度の知識しかなかったのですが、今回の事をきっかけに、少しずつ調べる機会が増えるようになりました。若い世代の方々には私のような人も多いと思うので、瀬戸内国際芸術祭が大島でも開催されているというのは素晴らしいことだと思います。アートの展示を見に行き、大島青松園という地を知る、足を踏み入れる、それだけでもすごく意義のあることだと感じました。

船に乗って辿り付いた島は人気が無くとても静

かでした。海も波が静かで、夕陽を見ながら座っている、ゆったりとした時間が流れていて、私にとってはすごく非日常的な感覚でした。しかし入所されている方々には、ここでの暮らしが日常で、青松園が故郷だと感じられている方もいるのだと思います。ハンセン病の方が長い間、世の中から偏見や差別を受けてきたという歴史があるので、入所されている方がこの島では少しでも、ゆったりと気持ちよくなるして暮らしていってほしいなと願うばかりです。しかし、ただ静かでゆったりとしているだけでなく、何かを訴えかけているような空気を感じました。帰ってからこの感覚は強く残っていて、これは忘れてはいけないことだなと心に刻みこまれました。

瀬戸内国際芸術祭がきっかけになって、沢山の方にこの島のことを知ってもらおうこと、何かを感じてもらおうことが大切になるのではないかと思います。私もまたいつか機会を作って訪れようと思いました。

瀬戸内海の島旅 十句

岡山県真庭市 湯浅 芳郎

大山の神の身震い鳴猛る

(旅行前の10月21日午後2時7分鳥取中部地震)

秋うらら菅笠かぶり舟遊び

(栗林公園散策)

納骨堂パゴダの上の天高し

(大島青松園2句)

突堤に両手振る人残り菊

温泉を浴びて酔うて歌うて夜長かな(宿・花樹海)

島を船を三百六十度に瀬戸の秋

(フェリー船上)

秋高し巨大カボチャの座りをり

(草間彌生作品)

秋没日哀史幾多の瀬戸の海

ふるさとへ釣瓶落しのなか走る (一行と別れて)

豌豆を時き島旅を懐かしむ (数日後、美甘にて)

足あと
足あと

さらに必要とされる生命観 〜25年目の再確認(その1)〜

大阪府茨木市
松浦 武夫

はじめに

現在は大倭を離れて在宅介護の職場に移っていますが、私は10年間、大倭の障害者施設の職員でした。平成3年8・9月号『おおやまと』(通巻252号)に「法主様にお聞きします……現代における悲田院の意味——生命観が揺れ動く中で——」を掲載してもらいました。この法主さんと対談は、大倭の原点から始まります。

25年前に社会で論議されていたものには、それまでの死の三兆候から、機械でしか認識できない脳死という死の定義への転換がありました。そして現在は、出生前診断の臨床応用と並行して、IPS細胞という遺伝子段階の治療が試行されています。

今年、障害者差別解消法という法律ができました。多くの障害当事者が長年にわたり活動し、ようやく日本で成立したのですが、同じ年に入所施設での多くの障害者を抹消する衝撃的な事象が発生しました。

そして、高齢化は認知症や延命治療の是非に及び、長生きが苦難の時代になりつつあります。自然死だけでない死のあり方に、安楽死や、死に方や死なせ方が、人為的に操作できる時代にもなってきました。何のために延命も安楽死も、それらの操作が必要になってきているのでしょうか。

大倭は医療と福祉の提供を行っています。そこに多くの人の生と死があります。しかし、意識的でないで見過ごす事柄や、見失う事柄がありま

す。25年前の法主さんの言葉をもう一度考え、現在に活かす視点を探すのは、決して過去の課題への事柄に留まる内容ではないと感じています。

大倭の原点の再確認

法主さんは「この山へ入った時に、歴史でも何でもないんやけど、ここに光明皇后の靈魂というのがあるという事は実感として解ったんやね」とまず述べられました。光明皇后は聖武天皇の皇后です。悲田・敬田・施薬・療病院の四箇院を聖徳太子が建てたという伝承は有名ですが、記録では723年(養老7年)の皇太子妃時代の光明皇后が、興福寺に施薬・悲田の設置をしたとあります。

しかし法主さんは伝承の上に大倭を説明するのはなく、「光明皇后の心」を実現することに意味を感じたと言われました。そして、「その時、光明皇后が出てこられて、あじさいの花を出されたんですよ。結局、心というものは、地下水みたいなものであってほしい」という事と、形としては「あじさいのごとくに」という一つの暗示やね」とあります。

私が大倭を最初に訪れたのは、コミュニティ(共同体)的な活動で知り合った人が、「交流の家」を紹介してくれたのがきっかけでした。38年前でしようか。その時も大倭あじさい邑と呼ばれていました。「心というものは地下水みtainいものであってほしい」とは、地下にあって澄んだ水が万物を養うような心という事でしょう。あじさい

いのごとくに」とは？ 仏教を厚く崇拝した光明皇后であるのに蓮の花ではなく、「あじさい」の花であったのは、「生活は個人個人で財布(経済)が一つ、そして心も一つの生活共同体を始めよ」という暗示であったと、法主さんは言われます。

当時は日常の生活のあり方のカウンタカルチャー(対抗文化)として、各地に共同体という形態が模索され、若者も巻き込んで活性化していました。日常の生活が求めるものの意味やあり様に、他者との関係性や自己の捉え方の再確認が必要と考えられたのではなかったでしょうか。その中で、大倭は一つの実践の地という事で多くの滞在者が集まり、交流が行われていました。

障害者問題でも生活を共にした関係のあり方が、介護や作業所の運営で試行されました。「交流の家」は関西のFIWCですが、FIWC東海委員会による「わっぱ」の障害者共同作業所からの活動は、一つの生活共同体のあり様の実践と私は感じています。

最近の障害者や病者の入所施設が共同体やアジュール(避難所的空間)と位置づけられ、評価されるのを散見します。しかし、共同体の意味が全く異なり、社会から疎外・排除する構造や形態が、一定の評価になっていきます。若い研究者を中心にしてまとめられている方向は、大倭のあり様も丁寧に説明しないと、表層的な特定の人を守られる領域という、社会全体からの分離が当然になる思考に馴染んでしまいます。

法主さんの言動で私が強く尊敬していたのは、「去る者をして追わず、来る者をして拒まず」を実践する度量と柔らかさでした。実際に私が大倭の身体障害者入所施設の職員になった時は、施設の事務所に居た法主さんの「明日から来たらしいやん」との一言でした。(続く)

あじさい日誌

11月12日 午後2時から大倭会主催文化講演会。講師は探検家・人類学者・武蔵野美術大学教授の関野吉晴さん。関野さんのファンでネット等で講演会を知った、大倭には初めてという参加者も大勢いて盛況でした。講演終了後、大倭会館で関野さんを囲んで行われた懇親会でも関野さんは質問によく答えて下さり話がはずみました。関野さんは大倭会館に宿泊。

講演要旨は後日『おおやまと』に掲載予定。

11月15日 大倭神宮の月次祭。

11月18日 午後、交流の家でIWC定例委員会。

11月21・22日 早朝から職人さんにより、大倭神宮敷地の隣との境界に植えられていた杉の太木が伐採されました(写真下)。

後、教長さんによりお清めの神事が行われました。

11月23日 大倭大本宮月次祭。午後4時から大倭会館で大倭会役員会が開かれました。

この日、小池輝美さん(神奈

川県藤沢市)が来邑、杉本順一さんと歓談されました。

11月27日 奥津斎庭の神籬の足元に高橋良美さん見田映子さんお二人により新藁が敷かれました。金剛大龍王さんがお祀りさ



新年のご挨拶を申し上げます

過去の歴史が示す流れの一駒は、人間の意志で作るものには相違ないが、全体の歴史の流れは人間の作為ではないのである。私は人類の歩みについても唯物史観一辺倒ではどうも偏見のような気がしてならない。流れてきた現界の実相が人類の歴史であり、無常に流れている力が霊界にある神慮と観るのが私の癖である。人間は生かされながら、自分の意思を持ち自分の生き方を求めます。法主さんのおっしゃる神慮について、考えてみてはどうでしょう。皆さんお変わりありませんか、お互い今年も元氣にお会いしたいものです。今年もよろしく願います。

大倭七十三年 元旦

宗教法人大倭教 教長 矢追 家麻呂

紫陽花邑 邑人一同



れています。

12月4日 大倭神宮において金鶏祭が開かれました。この日初めて、相原琢人(さいたま市)、高松聖龍・花原由佳・星原夏子(兵庫県芦屋市)、納富花子(京都市)、水橋悦子(大阪市)の皆さんが参加されました。

その後、紫陽花邑に來られて拜殿や教務本庁で、永坂まゆり・あづみ姉妹(神奈川県大和市)、林修三・杉本さんらと懇談。

12月6日 大倭神宮月次祭。夜、大倭会館で邑倭の会。

12月10日 昇ちゃん今年のは今年のは未年始は弟さん(神奈川県横須賀市)が病気で帰省できません。どう伝えるか思案中。

大倭安宿苑では

11月11日 矢追美壽紀理事長が平成28年度社会福祉功労者厚生労働大臣表彰を受けました。

11月21日 午後6時30分から会議室にて各分野の表彰者12名の祝賀会が開催されました。

11月25日 現在工事中である救護施設須加宮寮の上棟式が、守護霊である成謙坊大善神へご報告のあと午前9時30分から工事現場で行われました。

(菅原園)

11月21日、菅原園作品展展示会を開催。12月17日まで。

(須加宮寮)

の作品前では記念撮影。

(長曾根寮)

11月16日(日) 富雄南中学の生徒が3日間の職場体験実習。

11月17日(特養) 誕生会で9名(内白寿1名)の方のお祝い。

(茂毛路園)

11月21日 合同防災避難訓練。(八重垣園)

あんない

*年始祭(大倭神宮)

1月1日(祝) 午後1時から紫陽花邑内の諸霊へご挨拶。

午後2時から大倭神宮にて。

*月次祭(大倭神宮)

1月6日(金) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催第576回祝会

1月8日(日) 午後2時より大倭大本宮拜殿にて。

*大とんど

1月9日(成人の日) 午前9時30分より大本宮西の齋庭にて。注連縄や門松等を火にあげる神事です。当日の天候により日時を変更する場合があります。

針金・プラスチック等 不燃物は必ずはずしてきて下さい。

*月次祭(大倭神宮)

1月15日(日) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大倭大本宮)

1月23日(月) 午後2時より大倭大本宮拜殿にて。